



神奈川県

# 内水面試験場コラム



<https://www.pref.kanagawa.jp/docs/a4y/koramu/2022koramu.html>

令和8年1月28日

## 放流したアユ種苗を見つける

アユは秋に川の砂礫底で産卵し、孵化した仔魚は流れに乗って海へと  
流下します。そして、冬の間は海で成長し、春になると稚魚になって川  
へ戻ってきます。神奈川県の河川では、3～5月頃にアユが遡上し、そこ  
で成長して解禁後の釣り資源となります。しかし、海での生存率や河川  
環境の影響などにより、アユの遡上量は極端に変動することがあり  
ます。

そのため漁協ではアユ釣り資源のため、人工的に育てたアユ種苗を  
放流しています。

この人工アユ種苗が生き残っているかは気になります。しかし、春に  
なると相模湾から天然の海産アユが大量に遡上するため、釣れたアユを  
一目見ただけでは、天然種苗か人工種苗かを見分けることは困難です。

そこで、放流前に標識をつけることで識別を可能にしています。  
標識にはさまざまな種類がありますが、魚に負荷をかけすぎないこ  
とが重要です。また、魚へのダメージを極力少なくすることも求めら  
れます。アユには背びれの後方に「アブラビレ」という小さなヒレがあり  
ます(写真1)。このヒレはサケ・マスの仲間に特徴的なもので、切り取

ると再生しません。諸説ありますが、遊泳や生存に影響を与えないことから、アブラビレを切除する方法が標識法として一般的に用いられています。

アブラビレを切除する作業は、人工種苗にストレスをかけず効率的に作業を進める必要があるため、麻酔をかけておとなしくなった状態でハサミを使って切除します（写真2、3）。この作業には時間がかかり、また放流試験では1,000尾以上のまとまった量を放流しないと標識したアユを発見できない可能性があるため、漁協や関係団体と協力して標識付け作業を行います（写真4）。

このような標識をつけることで、人工種苗の移動状況やアユ釣り資源への貢献度を確認することができます。これらのデータを集積することで、今後の放流計画に役立てる資料として活用していきます。

ないいめんしけんじょう 内水面試験場 しゅにんけんきゅういん やまだ あつし  
主任研究員 山田 敦



しゃしん 写真1 アユ(矢印がアブラビレ) やじるし



しゃしん 写真2 アブラビレカット作業風景 さぎょうふうけい やじるし



しゃしん 写真3 カット済み (矢印がカットされたアブラビレ) す やじるし



しゃしん 写真4 ヒレカット作業全景 さぎょうぜんけい やじるし